

# 阿波踊りの動きの多様化とその要因

## —その1—

中村久子(徳島大学)

### 【研究の目的と方法】

戦後の阿波踊り(城下町徳島の盆踊り)は、上手に踊るということだけでなく、動きに変化を加えたり、群を意識して踊られる等、見られることを意識して発展してきた。阿波踊振興協会等に属している、いわゆる有名連はもちろん、協会等に属していない連の阿波踊りの動きにも多様な変化が見られるようになった。

そこで、地域に生まれた盆踊りに、このような動きの多様化が見られることになった要因を文献や資料によって探ることとした。

阿波踊りに多様化をもたらせた要因には、踊りそのものが多様化しやすいという阿波踊りそのものに起因する内的要因と阿波踊りを取り巻く環境等に起因する外的要因に分けることができると考えられる。今回は内的要因について考察することにした。

### 【研究の結果と考察】

#### 1. 踊りの振りについて

阿波踊りについて小寺<sup>1)</sup>は「急調の三味線で、踊の振も一定せず自由奔放に踊る」と紹介している。檜<sup>2)</sup>も「阿波踊りの一つの大きな特徴は、振付がないということである。どこの盆踊りをみても、一つの二つの……、チョチョンがチョンという踊り方である。阿波踊りには振付を覚えるということは全くない。手を上へあげて、リズムに合わせて踊れば阿波踊りになる」と述べているが、さらに「ただ、その時に約束事が一つある。これが阿波踊りのもう一つの大きな特徴である。一歩前へ出した足を、も一度そこで踏みかえて、足で二拍のリズムを数えつつ前進するのである」とつけ加えている。

戦後の阿波踊りの踊り方についての記述<sup>3)</sup>を見ると、檜の言う約束事が共通に記されている。戦後の阿波踊りは自由奔放に勝手に踊ると言うより、約束事を踏まえて自由に踊っていると言える。ということは、檜のいう約束事が現在では阿波踊りの振りであるといえよう。

阿波踊りの振りは♪♪|♪♪と二小節で一まとまりになり、それを繰り返して踊るので、振りの一まとまりが非常に短いといえる。また、踊り方は両手を上方に挙げ、図1の足に合わせて右手右足を前方へ、左手左足を前方へと交互に進んでいくだけという単純で簡単なものである。このように、単純で一まとまりが短いために、高低の変化

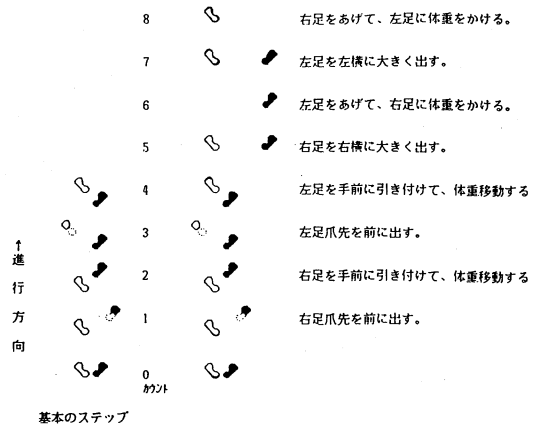
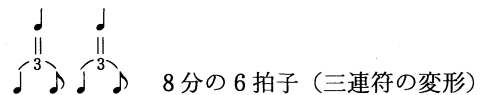


図1 Ma. Nの即興表現におけるモチーフe

をつけて踊ることや、足を横に踏み出して体重を移動させる変化<sup>4)</sup>が生まれ、回転等異なる動きとの組み合わせ<sup>5)</sup>をも可能にした。

#### 2. 踊りのリズムについて

岡田<sup>6)</sup>は阿波踊りを原始的な単純二拍子であり、簡単に口承で伝えることができ、踊りも囃子も単純なので誰にも取っつきやすいと述べ、阿波踊り(ぞめき)のリズムの基本を次のように示している。



上述のように、お囃子の三連符の変形が単純な二拍子を、生き生きとさせ、踊りやすくしているが、動きのリズムは二拍子で、二拍で一歩ずつ前進する。二小節(四拍)で一まとまりとなるので、単純で短いリズムパターンである。そこで、アクセントをつけたり、進行方向を変えて進むことにより踊り手独自の動きのリズムパターン<sup>45)</sup>を図1のように生み出すことが可能になる。

#### 3. 踊りの形態について

嘉永年間(1848年頃)に吉成葎亭が描いた六曲一雙屏風「阿波踊り絵図」「橋上の阿波踊り絵図」<sup>7)</sup>に見られるように、阿波踊りの形態は江戸時代から“行進型”であった。三隅<sup>8)</sup>が盆踊りについて「昔は道行→円陣踊り→道行という構成のものが多く、近代、円陣の踊りだけを伝えているものの中には、昔道行も行ってたのを簡略化したと伝えているところがある」と言うように、多くの盆踊りが道行を省略して円陣の踊りを残しているのに対して、阿波踊りは円陣の踊りが省略されている。戦前の阿波踊りが広場等で輪になって踊られていたことを考えると、円陣での踊りは戦後になってから急速に省略されたのであろう。

ともあれ、多くの盆踊りが輪になって踊る形態

を残しているのに、阿波踊りは行進型を残してきた。輪になって踊る形態では、一部の人が途中で止まったりすると後から踊ってくる人がそこでつかえてしまうので、全員が歩行を合わせて前進後退して踊る必要がある。“行進型”で踊るということは、グループ毎に前後の空間をとって踊れば、他グループと同時に前進後退しなくてもすむのである。

他グループと動きを合わせなくともよいということは時間構成の自由な変化<sup>5)</sup>につながる。また、隊列の自由な変化<sup>6)</sup>も“行進型”で踊るからこそできたのである。

戦前の阿波踊りは男女も女性も一緒になって踊っていたようであるが、戦後の阿波踊りは男性同士がまとまって男踊りを、女性同士がまとまって女踊りを踊る傾向が強くなった。このことは、男性の群と女性の群を意識して踊ることにつながり、群を生かした空間構成を生み出すことを可能<sup>5)</sup>にした。

#### 4. 伴奏音楽について

阿波踊りは、踊りを踊る人々と楽器を演奏する人々によって構成されている。連と呼ばれる踊りの集団には、踊る人々だけが所属するのではなく、楽器を演奏する鳴物と呼ばれる人々も所属し、その集団の伴奏音楽を受け持っている。言い換えれば、阿波踊りはそれぞれの連がお抱えの伴奏集団を連れて何処までも練り歩くことが可能な踊りである。

また、伴奏集団の存在はそれぞれの連がそれぞれのテンポで踊ることを可能にしている。例えば、踊るテンポを徐々に速めて踊りを盛り上げてから、音を一齐に止めて動きを一瞬静止させる等、他集団に気兼ねすることなく自由にテンポを変えられることができる。

動きのテンポを変えることだけでなく、先述したように独自の動きのリズムパターンを生み出すのにも、伴奏集団の存在は欠かせないものである。グループ毎に伴奏集団を抱えて踊る盆踊りは、現存する数多くの盆踊りの中でも希少な存在であろう。

#### 【まとめ】

阿波踊りの特徴を分析すると、他の盆踊りとは異なる特徴（振りが単純で、一まとまりが短い、行進型で、伴奏集団を持つ等）が見られる。その特徴が阿波踊りの動きの多様化を可能にする要因となっている。

しかし、徳島県には阿波踊りによく似ているといわれる民踊がいくつか存在しており、それらには阿波踊りのように多様な動きの変化は見られない。このことは、阿波踊りの動きの多様化が、踊りそのものに起因する要因のみでなく、阿波踊りを取り巻く外的環境にも起因することを示唆して

いる。今後、このことについて検討したい。

#### 引用文献

- 1) 小寺融吉(1935)：とくしまぼんおどり—徳島盆踊、郷土民謡舞踊辞典、名著刊行会、東京
- 2) 檜英司(1987)：踊り方教室、阿波踊り写真集踊らなそんな、徳島新聞社、徳島
- 3) 松本進(1980)：阿波踊りの手引き、阿波踊り、徳島市観光協会、徳島
- 4) 中村久子(1991)：阿波踊りにおける多様性について—その1—、徳島大学総合科学部健康科学紀要3
- 5) 中村久子(1992)：阿波踊りにおける多様性について—その2—、徳島大学総合科学部健康科学紀要4
- 6) 岡田寛斉(1993)：踊りに効果的な大音量、徳島新聞、徳島新聞社
- 7) 三好昭一郎他(1980)：阿波踊り絵図、橋上の阿波踊り絵図、阿波踊り、徳島新聞社、徳島
- 8) 三隅治雄(1992)：風流踊りと盆踊り、日本民俗学講座4 芸能伝承、朝倉書店、東京